

当協会主催の自閉症支援セミナーなどで、良く缶コーヒーの反復的な要求が強い方に、果たして〈一日に何本の缶コーヒーの提供が適切なのか？〉という質問を受けることがあります。質問者にとっては、今抱えているとても大きな悩み、課題なのでしょうが、残念ながら、質問の内容は、その質問者の支援レベルが、自閉症支援の一番最初の入り口レベルに留まっていることを反映しています。しかし、その支援の入り口を通ることをしなければ、次へのステップは当然進め無いわけですから、ここでの実践の方向が、その方の支援レベルの今後を握っていると思われまます。

そこで、次の支援に進みにくくするいくつかの神話\*について考えてみましょう。

### 【神話その1】

許し始めたら何本でも飲んでしまうのではないか、要求に歯止めがきかなくなってしまうのではないかという神話があります。

この神話は、知的障害や自閉症の方が、「我慢できない人である」あるいは「我慢することができるようにならない人」という偏見から出発しています。それは、彼らを馬鹿にしている態度と言えます。「我慢できないこと」の原因を障害という彼らの内側に求めるのではなく、支援者との関係の上に求め、「今までに我慢する方法を教えてもらっていない人」「適切な方法で我慢することを練習したことが無い人」と理解することができれば、支援の方法はいくらでも手に入れることができます。ここで取り上げた行動が、重篤な三次障害、四次障害ということになれば、自閉症<sup>入</sup>外<sup>ラ</sup>の障害特性に配慮した視覚的構造化の手法で、「いつ」「ど

こで」「どのくらい」、缶コーヒーを提供するのかが、本人と相談のしながら決定し、情報提供されれば、神話が間違いであることがすぐに確認できるでしょう。

### 【神話その2】

施設で、特定の一人の人に何本も缶コーヒーを飲むことを許すと飲めない他の方がそれが羨ましくて、集団に混乱を起こすという神話があります。他の方に良くない影響を与えるというわけです。

この神話は、施設職員が「現状より業務の量を増やしたくない」という無意識の抵抗を自己洞察することを避けるための屁理屈でもあり、知的障害や自閉症の方が「いつまでも他人の幸福ばかりが羨ましくて」「自分の幸福は自分の幸福、他人の幸福は他人の幸福であるという境地に辿り着けない人」という無知から出発している考え方です。

人は誰でも（障害が有ろうと無かろうと）、自分が、いろいろな人に支えられながら、ほどほどの幸福を手に入れていると実感することができれば、「となりの芝生が青く見える」ということが無くなります。但し、そこに至るまでの道程は決して平坦ではないし、ある程度の時の流れを必要とします。何回もいますが、それは誰でも（障害が有っても無くても）同じプロセスです。

その幸福にそれぞれが辿り着けば、夕食時、Aさんは缶チューハイを飲み、Bさんは雪見大福にきな粉をかけて食べ、Cさんはレトルトカレーをご飯にかけて、Dさんはシラスを振りかけて…というような風景が創出します。もうすでに、誰も〈となりの芝生は青く〉見えません。

【参考】\*ここでの神話とは、皆が根拠もなく絶対的事実だと信じている事象のことです。誤った方向に固定化してしまった常識とも言えます。